

【二厘より千圓まで】

泉友から「〇〇オークションのサイトに、古銭の看板が出品されていますよ」との連絡をいただきました。

早速、そのサイトを開きますと、

——おつ、山本さんのや！

なんとそこには、大仏前で親子二代に互って古銭商を営まれていた、山本清朝堂せいちょうどうの店の看板が出品されているではありませんか——。

——山本さんか——。

画像で見る看板の《大佛銭屋》の文言に、俄かに中学生から高校生の頃のことか蘇り、想いがアチコチを駆け巡るのです。

初めて山本さんのお店に伺ったのは、長兄が運転するピジョンのスクーターで行った中学生の時で、その最初の訪問が、鮮烈な記憶として今に残ることになりました。

格子戸を開け、土間に入りますと直ぐ右側に四畳半の部屋があり、

三和土たたくから部屋へ上がる貴船石きぶねいしの上には草履が綺麗に揃えられています。その部屋には和服を召された先客があり、兄弟二人が部屋へ上がらせてもらいますと、当方の訪問が暇される良い切っ掛けとなったように、入れ替わりにお帰りになるような雰囲気となりました。

そのとき、山本さんが兄に向って、「いま、これ頂戴しましたさかい、見やりますか？」と、申されたのです。

「????」

その部屋には小さな床の間が設えられていましたが、そこに風呂敷包みが置かれており、おもむろに兄の前に置かれたのです。

「こちらが大事にしてはったもんなんえ、どうえ？」
解かれた風呂敷の中から十二段重のねの桑の箱が現れました。

「この若い衆、お愉しみの最中やさかい、お見せしてヨロシおすか？」
「ほお、それはそれは。どうぞどうぞ——」

蓋を取りますと、一段目には皇朝の和同や萬年が並んでいました。どうやら、和服の方がお持ちになった蒐集品を購入され、その商談も了えた丁度その時に伺ったように、まことに間の良いときに行き当たったようです。

もちろん、山本さんと此方との交渉の場に残られるほどの野暮な方ではなく、手になされていた茶碗のお茶を飲み干し、茶托に戻して颯爽と席を立たれたのを憶えています。もちろん、その方のお名前をお尋ねするほど、兄は手前勝手な益暗ではありませんでした。

一も二も無くその箱を購入しましたが、その中には、後に鳥屋文と交換することとなった北宋の元豊通寶背俯月文の真書や、二〇〇二年に作りました『慶長通寶と仲良くするならば——』(附記①)の土台ともなつた、慶長通寶が三十枚足らずも入っていたのです。

こんな当方の、幸運な経験を思い出したのです。

さて、話しを看板に戻しますが、

そのサイトの謳い文句には《戦前木製看板、和同開珎図柄、大仏銭屋、両替商、アンティーク希少品、絶版品》とあり、寸法が記され、スタート価格が二千二百円となっていました。

後先なく応札し、無事に入手できた両面看板(図①)の上部には、和同開珎の図が描かれ、両面とも以下の同じ文言が墨書きされています。

——古銭一枚デモ御見せ下サイ

高價買マヌ

古銭買ハ早わかり本一冊金

壹圓五拾銭

大佛銭屋

看板にある《大佛》と云っても他所の方には判り難いでしょうが、家康が豊臣家を壊滅させるために色々と難癖をつけた一ツとして伝わる、「国家安康 君臣豊楽」の鐘が残る方広寺(図②)と申せば少しはご理解いただけますかね。

その方広寺の地所には嘗て、奈良の大仏さんよりも大きな盧舎那仏と大極殿が建立されていました。初代の大仏は秀吉の発願による木造、次いで秀頼が造らせた銅造、江戸時代